



小早川清《近代時世粧の内 六 口紅》木版多色摺 1931年

Topics

近代日本美術の百花

伊藤若冲 —アナザーワールド—

WiCAN2009報告

美術館の本格的な再開に際して

昨年の秋以来続いていた千葉市美術館の空調関係改修工事が無事に終了し、3月6日(土)からの第41回千葉市民美術展覧会で、全館を使っての活動を再開する運びとなりました。市民の各分野にわたる創作活動が一望できるこの大切な展覧会を、本年も欠かすことなく当館で続けさせていただけるよう、工事関係者には格段の配慮と努力をお願いしたものでした。日頃から美術に関心の深いご家族、ご友人をお誘い合わせの上、賑々しいご来場を心からお待ち申し上げております。

展示活動を1階のさや堂ホール1室のみに制限されて、改めて市立美術館としての重い使命と役割とに考え及んだものでした。当館は、平成7年、1995年の文化の日に開館し、今年の11月に15周年を迎えることになります。千葉市が平成4年に全国で12番目の政令指定都市に移行したことが契機となり、風格ある文化都市の一翼を担うべく期待されて実現したもので、幸いに多くの市民に愛され、育てられて、今日に至ったものでした。今回の休室は昨年9月から約6か月に及ぶものとなり、その間たとえ短期間とはいえ市と市民の負託に充分には応えられなかったことを、まことに残念に思っています。

美術館の歴史は、さほど古くまでさかのぼることができません。フランス革命後の1802年に、パリのルーブル宮内にナポレオン美術館が開設され、王室コレクションやナポレオンが集めた美術品が一般に公開されたことに始まるとされています(『新潮 世界美術辞典』)。日本では、明治5年(1872年)、文部省博物館(東京国立博物館の前身)が湯島の聖堂において開館し、博物資料の一部として美術作品も、はじめて公衆の目に触れることとなりました。

かつて古くは洋の東西を問わず、貴重で高価な美術品はすべて、王室や貴族の館、武将の城館や宗教的な施設などに秘蔵されてい

て、庶民が接近できる機会などはほとんど望むべくもありませんでした。近代日本の美人画家鏑木清方は、明治の幼少期を回想し、次のように語っています。「町の展覧会とも云へる絵草紙屋は、子供が懐く美しいものへの憧憬をたやすく充たしてくれる恰好な楽園でした。」「暖簾の掛かった店の中には、右と左と幾筋も引き渡した細引きの綱に、竹串で夾んで吊り下げた三枚続は、二段、三段、役者絵あり、女絵あり」(『こしかたの記』)で、夜遅くまで立ちつくしたということです。そうした絵草紙屋の店先の版画でなければ、お寺や神社の絵馬堂に奉納された板絵などが、一般人が実際に接することのできるせいぜいの美術品だったのです。

市民美術展覧会の後の、再開後はじめて当館が独自に提供する企画展は、「近代日本美術の百花」と題するもので、明治以降近代の版画、絵画コレクションを約250点、一挙に公開する予定です。担当からのメッセージは「百花繚乱、多種多様な花々の競演をお楽しみ下さい」ということです。豪華なラインアップは絵草紙屋や絵馬堂のそれをはるかに凌駕することは請け合いです。華やかな活気がギャラリーに戻って、晴れて皆様をお迎えできるその時を、今からわくわくと心待ちにしているところです。

ギャラリーはじめ諸施設の休室中には、皆様大変ご迷惑をおかけしましたが、その間も、もとより館員たちの地道な活動は続いており、その成果をご覧に入れようと手ぐずねを引いて4月からの新年度を迎えようとしています。その全容は改めてご紹介する機会があると思いますので、どうぞ楽しみにご期待下さいませよう、お願い申し上げます。

〔館長 小林 忠〕

千葉市美術館はリニューアルオープンいたします

千葉市美術館は、2009年9月より2010年2月まで、空調設備工事のため展示室、貸出施設、美術図書室等を休室いたしました。休室中はご不便をおかけいたしましたが、皆様のご理解とご支援のもと、工事は概ね完了しつつあります。そして3月6日から始まる第41回千葉市民美術展覧会をもって、千葉市美術館の展示室がリニューアルオープンしました。また講堂、講座室といった施設の貸出も3月より再開するとともに(さや堂ホールと市民ギャラリーは千葉市民美術展覧会で使用するため、同展終了後より貸出しを再開いたします)、お休みをいただいていた美術図書室も開室いたします。また工事中さや堂ホールにて期間限定で臨時営業していた

ミュージアムショップも、市民美術展の初日より、以前と同じ7階で通常どおりの営業を行っております。

再開後も、千葉市美術館では、右側のページで紹介している「伊藤若冲―アナザーワールド」展をはじめ、魅力的な展覧会を多数用意して、皆様をお待ち申し上げております。今後とも千葉市美術館の活動にご理解とご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願いいたします。

—予告—

伊藤 若冲 アナザー ワールド

♥若冲ブーム継続中

伊藤若冲(1716-1800)のブームが継続中です。2000年の京都国立博物館での「没後200年 若冲展」で大ブレイク、その後も2006年から2007年にかけて在米プライス・コレクションの里帰り展「若冲と江戸絵画」があり、2007年には相国寺で《動植綵絵》(宮内庁三の丸尚蔵館)と《釈迦三尊像》(相国寺)一挙公開がありました。同年夏、千葉市美術館でも「若冲とその時代」展(図1)を開催してみたところ、所蔵作品展としては異例なほどの反響がありました。昨年秋にはMIHO MUSEUMでの「若冲ワンダーランド」展が新出の



若冲とその時代

Jakuchu and His Age
2007年8月7日(火)～9月17日(月)

図1「若冲とその時代」展チラシ

《象鯨図屏風》(MIHO MUSEUM)を中心に人気を集め、東京国立博物館の「皇室の名宝」展では83年ぶりに東京で《動植綵絵》30幅が一度に展示されました。もはや一過性の若冲ブームではなく、日本絵画の大スターとして地位を確立したのかもしれません。今年も静岡県立美術館と当館の「伊藤若冲—アナザー



図2《樹花鳥獸図屏風》(右隻 静岡県立美術館)



図3《乗興舟》(部分 千葉市美術館)

ワールド—」展の他、金刀比羅宮でも伊藤若冲《花丸図》(奥書院上段の間障壁画)の公開が3月19日(金)～6月13日(日)に予定されています。

♥アナザーワールド

《動植綵絵》のような華麗な極彩色の作品だけが若冲の世界ではありません。若冲の個性は水墨の作品にもよく表れます。もしかしたら水墨画のほうが、かたちの面白さは際立つかもしれません。本展覧会はまず若冲前史として、河村若芝や鶴亭の黄檗絵画を若冲と一緒に展示します。黄檗宗は江戸時代前期に中国から伝わった新しい禅宗の一派で、広い範囲にその文化の影響を及ぼしました。若冲は美術として黄檗絵画に接しただけではなく、後には出家して黄檗宗の僧草叟となります。また、若冲の初期の水墨画は鶴亭の作品と相通じる雰囲気があります。

もちろん着色の作品も展示して、その鮮やかな色彩と緻密な描写をお楽しみいただきますが、同じ題材を描いた水墨と着色の作品を比較できるのも今回の展覧会のポイントです。モザイクのような画面が印象的で人気の高い《樹花鳥獸図屏風》(図2 静岡県立美術館)も出品されます。

話題の《象鯨図屏風》も期間限定(6月14日-6月27日)で展示します。若冲作品に倣って象と鯨を描いた大坂の絵師松本奉時の作品を合わせてご覧いただけます。水墨画と同じモノクロームの世界を版の表現で追求した《乗興舟》(図3 千葉市美術館)、色彩を加えた《花鳥版画》(平木浮世絵財団)といった版の世界も紹介します。その他、点描のような水墨表現が珍しい《石灯籠図屏風》(京都国立博物館)、抽象的な表現を見せる《蓮池図》(西福寺、重要文化財)など前期後期合わせて165点を展示する予定です。

首都圏での若冲展は1981年の渋谷区立松濤美術館での特別展示以来約30年ぶり、大規模なものとしては1971年の東京国立博物館での特別展観(若き日の現館長小林忠が担当者として汗を流したとか・・・)以来で約40年ぶりとなります。若冲のアナザーワールド、水墨画の世界をご堪能下さい。

[学芸員 伊藤紫織]

伊藤若冲 —アナザーワールド—

2010年5月22日(土)▷6月27日(日)

6月7日(月)に大規模な展示替を行います

10:00—18:00(金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 6月7日(月)

[観覧料] 一般 1,000(800)円

高校・大学生 700(560)円

小・中学生 無料

* ()内は前売、団体30人以上および市内在住60歳以上の料金

*前売券は、千葉市美術館ミュージアムショップ(5月9日まで)、千葉都市モノレール「千葉駅」「千葉みなと駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(6月27日まで)にて販売

近代日本美術の百花

4月6日より始まります所蔵作品展は、「近代日本美術の百花」と題して開催いたします。新年度の始まりを告げる展示であり、また改修工事の完了を記念する展示でもあることから、喜ばしい気分を込めて、テーマは「花」。大正・昭和期前半の日本画・版画を中心に、花にまつわる作品をご覧ください。

「花」と聞いて、イメージするものはさまざまでしょう。植物の花には限りなく種類がありますし、ほかにも美しさや盛んであること、名誉や飾るという行為など、花という言葉は多彩な意味を有します。美に直結するだけに、アートにとっては大変近い存在ともいえるでしょう。今回は、「花」から連想される8つの章を設定して展示を構成いたします。以下、そのあらましと代表的な作品をご紹介します。

花とアートとの関係を考える時にまず思い浮かぶのは、描かれた花々でしょう。季節感を何よりも尊ぶ日本人にとって、限られた時期に咲く花は、大切な四季のしるし。季節を象徴する花を描き、またその絵を折々に掛けかえて楽しむことは、ごく自然な習わしとして伝えられてきました。はじめのセクションでは、四季それぞれの花の絵や、大画面に四つの季節を盛り込んでしまうまことに贅沢な四季花鳥図(図1)を展示いたします。ほかにも緑滴る、あ

るいは紅葉あやなす風景画や、季節を少々先取りして花火という画題にも視野を広げ、春夏秋冬を愛でるさまざまな筆の運びをお楽しみいただけます。

梅や桜、藤や菊といった花は、季節をあらわす記号として長く描かれてきましたが、近代になると新しいモチーフが登場してきます。珍奇な外来種も取りあげられますが、雑草に素朴な美が見いだされるのもこの時代ならではの。たとえば陶芸家として知られる富本憲吉は、それまでは画題になることのなかった花菜や野草をとことん観察し、独創的な模様となしました(図2)。花々との新たなつきあいかたを示す一群を、最初のセクションと対比的に展示してみます。

女性に花にたとえるのははばかりながら、江戸期以来連綿と描かれてきた美人画は、やはりアートの「花」といえそうです。かつては理想とされる女性美が時代とともに移り変わったものですが、近代にあってはその姿形もファッションも多様化して、可憐な花や清楚な花、妖花や艶花が咲き乱れています。竊木清方の描く粋なご婦人、橋口五葉による典雅な女たち、凄艶なモガをよく描いた小早川清の作品(図3)などから、作家たちの美意識の違いをお楽しみください。



図1 森寛斎《四季花鳥図屏風》紙本着色六曲一双屏風（右隻） 幕末～明治時代



図3 小早川清《赤いドレス》
紙本着色二曲一隻屏風 昭和初期



図2 富本憲吉『卓上』1～4号表紙
木版単色摺 1914年

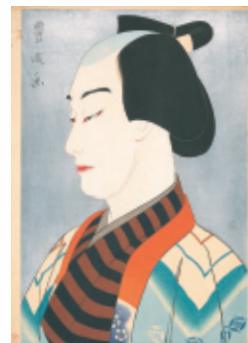


図4 山村耕花《梨園の華 初代中村雁治郎の茜半七》
木版多色摺 1920年

続いてご覧いただくセクションでは、一転して男性が主役。舞台の花、歌舞伎役者たちの似姿です。役者絵は浮世絵版画の重要なジャンルでしたが、近代においても制作されています。今回は山村耕花による木版連作、その名も『梨園の華』を中心に展観いたします(図4)。役者ひとりひとりの個性と役柄の感情に肉迫した一群からは、当代の花形役者ならではのオーラとともに、凄みをはらんだ色香がふんぷんと漂います。

近年注目される機会の増えた大正新版画。錦絵の技と風俗画としての魅力を近代に返り咲かせたこの動きに、実は多くの外国人がかかわっていたことはあまり知られていないのではないのでしょうか。展示の中盤では明治期の末から大正期にかけて来日し、日本の彫師や摺師とともに制作した作家たち—ヘレン・ハイド(図5)やバーサ・ラム、エリザベス・キースらの作品を取りあげ、彼女らが江戸の花たる錦絵に何を見、なぜ海を越えるほどに惹かれたのかを探ります。

本展の対象である大正から昭和のはじめにかけては、江戸の情調がノスタルジックに求められた一方で、新興のモダン都市を謳歌する作品も数多く生まれました。次なるセクションは、題して「花の都」。8名の版画家たちによるシリーズ『新東京百景』を中心に(図6)、コンクリートとガラスで衣替えしつつあった盛り場の、昔日の賑わいをしのんでみたいと思います。

花は、単に咲いているさまが描かれるだけでなく、何かの模様として画面に登場すること多いもの。続いてお見せする作品群の共通項は、装飾としての花々です。人物の服装や調度に描き込まれた花模様には、見つける喜びが仕掛けられているような、描写を超えた作者の意図が感じられる時もあります。また木版で丁寧に摺られた図案集の数々や(図7)、見返しなどに意外な図柄が潜む装幀本もこのセクションの見所です。

花の持つ強く幸せなイメージは、しかし、はかなさと表裏一体でもあります。また日本人は古来、花の移ろいやすさにも、あるいはそれにこそ、美を感じてきました。展示の最終章では、作家たちが花に何を見、花の絵にどのような心象を重ねたのかを見つめます(図8)。

以上、ごく簡単に展示をご紹介します。改修工事を経ておよそ半年ぶりのコレクション展となります本展は、選りすぐりの絵画約50点、版画約200点から構成されます。花というテーマにふさわしいこの季節。百花、いやそれ以上の花々の咲き乱れる展示室へ、ぜひ足をお運びください。

[学芸員 西山純子]



図5 ヘレン・ハイド《亀戸天神の太鼓橋》
木版多色摺 1914年



図6 深沢索一《新東京百景 新宿カフェー街》
木版多色摺 1930年



図7 神阪雪佳『百々世草』より 木版多色摺 1910年



図8 松林桂月《春宵花影》絹本墨画淡彩一幅

近代日本美術の百花

2010年4月6日(火)▷5月9日(日)

10:00—18:00(金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

〔休館日〕 会期中無休

〔観覧料〕	一般	200(160)円
	高校・大学生	150(120)円
	小・中学生	無料

* ()内は、団体30人以上の料金

*千葉県内在住60才以上の方は無料



千葉大学の特色ある授業として*、また、当館のアウトリーチ活動として、すでに7回目となる「千葉アートネットワーク・プロジェクト(WiCAN)2009」は、イベント月間<Winter Weekends with WiCAN(WWwW)>(2009年11月27日～12月23日)を中心に、半年以上の時間をかけて、いくつかのプログラムを行ってきました。準備期間を含めると、ほぼ1年がかりのプロジェクトになります。本年度は、プロジェクトの山場と工事による展示室の休室時期が重なり、美術館にとっては、館外活動としての意味がこれまで以上に問われる中での実施となりました。

*WiCANプロジェクトは千葉大学教育学部芸術学研究室および普遍教育教養展開科目「文化をつくる」を母体とし、実行委員会により企画運営されています。

前号の美術館ニュースでもお伝えしましたが、アーティスト・ユニットのトーチカを迎えて、ロケ地ごとに地域の人々とともに光のアニメーションを制作した「PIKAPIKA in CHIBA」は、10月の作品完成を第二のスタート地点として、舞台となった場所を中心に市内各所で上映会や学生たちの手によるワークショップを展開して



「ピカピカ☆クラブ」への招待状兼スタンプカード

きました。千葉駅前の大型モニターや中央公園で予告編をご覧になった方もあると思いますし、千葉市科学館でも上映をしていただきました。中央公園も科学館のある建物「きぼーる」も、アニメーション本編にロケ地として登場しています。

美術館では、さや堂ホールでのコレクション



「ピカピカ☆クラブ」の様子

展示期間にあわせ、1階のフリースペースを使って上映し、会場ではWWwW会期中、放課後の時間帯に小学生向けのワークショップ「ピカピカ☆クラブ」を開催しました。アニメーションの基礎を体験するための入門編・オリジナルの短編づくりに挑戦する応用編をクリアし、スタンプを集めると、ピカピカ・マスターに認定されます。



入門編をクリアしたら、次は動画に挑戦

実施にあたり、美術館から徒歩圏にある3つの小学校の協力を得て参加を呼びかけましたが、放課後の子どもたちの遊び場・足の向く先として、美術館は魅力を持ち得るのでしょうか。ちょうどこの『C n 53』が発行される頃、「ピカピカ☆クラブ」拡大版ともいべき最後のワークショップが行われます。市街地の美術館として長年の課題となっていた近隣小学校との連携や、「歩いて来られる」距離の子どもたちへの働きかけに対して、これを機にさらに取り組んでいきたいと考えています。

WiCAN2009のもう一つの舞台、海浜ニュータウンでのプロジェクト「EAST MEETS EAST」では、特定非営利活動法人ちば地域再生リサーチとの協力により、イギリスから二人のコミュニティ・アーティスト、マイケル・ニーダムとアシュリー・マコーミックを招き、高洲高浜団地での滞在を軸に、シンポジウムと交流プログラムを行いました。また、団地での活動からつながりを得て開催した「かえっこバザール」は、アーティスト・藤浩志の考案によるもの。「かえっこ」とは、いらなくなったおもちゃを子ども通貨=カエルポイントにかえて、他のおもちゃと交換できる遊びの場で、こどもたちの自主的な活動を生み出し、地域の様々な場を活用するユニークな手法として、これまで全国300カ所以上で開催されてきました。アーティストのつくりだした「かえっこ」という仕組みは、各地で開催されるた

びに、担い手や地域によって異なるかたちをとり、予期せぬ展開を見せます。ちょうど、PIKAPIKAというアニメーションづくりの手法が、ユニークでありながら汎用性の高い優れたコミュニケーションツールとして、アーティストの手を離れ、その魅力を知った多くの「素人」によって次々と新しい作品が生み出され、ウェブ上で公開され続けていることを考えると、WiCANが今年度取り組んできた2つのプログラムに共通する部分が見えてくるのではないのでしょうか。

アーティストからの一つの投げかけをきっかけに、コミュニティの中に新しい関係性が生まれ、その中から主体的な活動が始まることが重要ではないか。議論の為の起動システムとしてアートがある、と、かえっこを生み出した藤浩志は言います。そうであれば、「参加型」をうたうアート・プロジェクトの「参加」とは、本来、こうして関わったすべての人々がそれぞれの問題意識に引きつけてプロジェクトの当事者となるよう促されていることをさしており、関わる人の数だけ、そのかたちは異なるといえるでしょう。美術館が地域社会において引き受けるべき役割もまた、このプロジェクトを通してより明らかになっていくことが期待されます。

〔学芸員 山根佳奈〕

ボランティア日和 episode22

私はだいたい3年位、千葉市美術館でボランティアをしています。美術館のボランティアをしているといっても、『美術手帖』を毎月欠かさず読み耽り、家具はモダンなデザインで占められている、というわけではないです。因みにこの原稿は、炬燵で書いています。

ボランティア活動を始めたきっかけは、サイクリングの途中、区役所1階のトイレを借りたとき、通路に設置されている美術展チラシのコーナーに紛れ、1枚だけ募集の用紙があったのでした。

当時の美術をとりまいている状況は、NHKの「日曜美術館」で現代作家の川俣正が仮設の建築物を現地の人と作り上げる、とか、現代作家の中村政人が千葉大学と地域の人たちと取り組む「検見川プロジェクト」等、美術館で作家の展示を鑑賞する従来の作品の見方に対して、見ず知らずの人が協働し、作家と一緒に制作の過程から経験する作品が、広く公に紹介されていた時期でした。そのとき直感で、ボランティアの活動と諸々の環境が結びついて、やってみたら面白いかも、という動機になり、翌日には面接の日取りを電話で伺い、面接後2期メンバーとして加入し、現在に至ります。

ボランティアのメンバーは、皆さんとても美術や地域のことに対して関心のある人が多く、その熱心さには圧倒されます。私は30代前半にしてメンバー最年少なのですが、ヒヨコ子という感じです。一つ一つのプロジェクトに対する根回しや、時間のかけ方が半端ないので、色々参考になっています。

千葉市美術館は浮世絵の収蔵品に定評があるということを、実はボランティアになって初めて知りました。個人的にはコンセプチュアル・アートの大家ジョセフ・コッスや、暗い展示室で明滅する宮島達男の展示、河口龍夫の蛍光灯が岩に貫通している作品等が、千葉駅周辺美術館で見られるというインパクトのほうが大きかったです。

まだ美術館のボランティアスタッフとして、いったい自分に何ができるのか、試行錯誤と暗中模索の日々ですが、その自由度や道無き道を行く感じが失われてしまうと、きつとつまらなくなってしまう気がするので、ボランティアとして活動している間、色々な事に興味を持って、たくさんの事を少しずつ吸収していこうと思います。

〔美術館ボランティア 白井竜彦〕

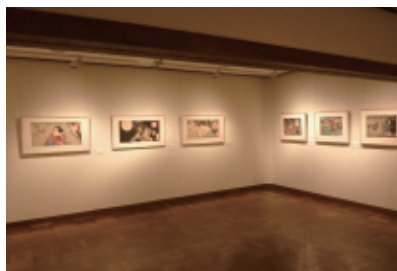


青少年の日フェスタにて

◎「はないばら」と「浮世絵残照」 美術館企画による千葉市民ギャラリー・いなげの2つの展覧会



丸山純子《よみぐち》



「浮世絵残照」展示風景

兵衛別荘に展示された丸山純子の《よみぐち》は、川の流れのなかを無数の花々が漂う様を表現したインスタレーションですが、美しく見える花々は実はスーパーのレジ袋から、川の流れは廃油を固めた石鹼からつくられており、美しさの背後にリサイクルという社会問題が潜んでいます。古い日本間の中に現れた廃品による黄泉の国が、訪れた人々に新鮮な驚きを与えていました。

「はないばらー秘められた美へ」(2010年1月13日ー24日開催)

千葉市民ギャラリー・いなげを会場に、千葉大学と千葉市美術館の共同企画による現代アートの展覧会を、昨年度より開催しています。これは同大学の授業「展示をつくるb」と「博物学実習b」を受講する学生、その講師、美術館が協力しあってひとつの展覧会をつくりあげようという試みです。本年は、花の美しさとその裏側に潜む毒をテーマに、花咲く茨「はないばら」というタイトルのもと、^{ありとも}在知、押江千衣子、荒神明香、坂田峰夫、須田悦弘、橋本トモコ、丸山純子の作品を展示しました。ギャラリー敷地内にある旧神谷伝

「浮世絵残照ー明治時代木版画の名品」(2010年2月9日ー21日開催)

千葉市民ギャラリー・いなげでは、毎年この時期に千葉市美術館の所蔵作品による展覧会を開催していますが、今年は「浮世絵残照」を行いました。明治錦絵の巨匠小林清親と月岡芳年の代表作や、浮世絵の伝統を受け継いで制作された明治時代後期の多色摺木版画など、明治時代の木版画の高度な技術と多彩な表現を紹介し、好評を得ました。

◎千葉市美術館「友の会」会員募集中

「伊藤若冲ーアナザーワールド」展をはじめ、2010年の千葉市美術館は注目の展覧会が目白押し！展覧会観覧何度でもオーケー、展覧会図録購入も一割引きの「友の会」入会が大変お得です。

	一般会員	学生会員 (大学・専門・高校)	ファミリー会員 (ご家族4名様まで)
入会金	1,000円	500円	2,000円
年会費	2,000円	1,000円	4,000円

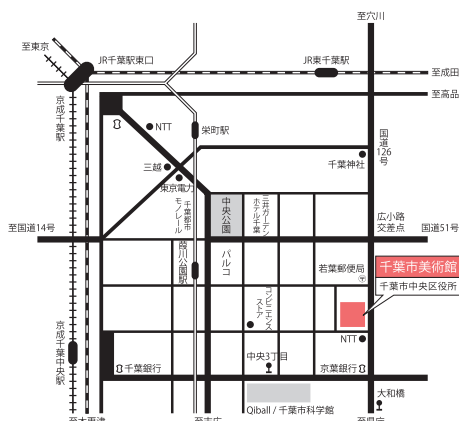
【会員の特典】

- 会員は、企画展や所蔵作品展を年間、何回でも観覧できます。
- 会員の同伴者(3名様まで)は、団体料金で観覧できます。
- ミュージアムショップで、展覧会図録やグッズを10%引で購入できます。(一部除外あり)
- 展覧会や講演会等の美術館情報をお送りします。
- 会員対象の催しもあります。

入会の申し込みは美術館受付にて。

【お問い合わせ】

千葉市美術館 TEL. 043-221-2311



【交通案内】

- ◎ JR千葉駅東口より
- 徒歩約15分
- 千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
- ◎ 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- ◎ 東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- ◎ 地下に駐車場があります

【編集・発行】

千葉市美術館
〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
【発行日】2010年3月8日
【印刷】半七写真印刷工業株式会社



千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

<http://www.ccma-net.jp>

